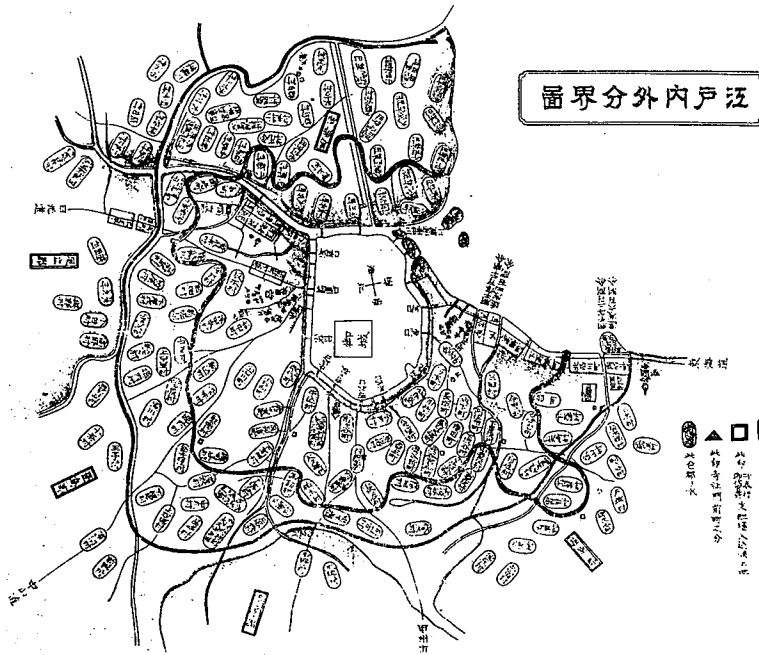


小田原史談

第33号
発行所 小田原史談会
小田原市幸一丁目
郷土文化館



江戸城明渡し

西郷、勝の対話
話は一瞬に決す

徳川幕府に対する朝廷の議論は二派にわかれた。西郷は終始とも寛大な意見を吐いていた。彼らが飽くまでも反抗するのなら勿論兵力をもって一撃でたたきつぶすまでもだが、すでに慶喜が恭順の意を表わしてはいる以上、これを殺す必要はさらさないという意向である。江戸城明渡しの際なども、議論も何もせず「私が引受けよう」とだけで、きわめてあっさり片付けてしまった。

西郷は、三月十二日に江戸高輪の薩州邸に入った。総攻撃は三日後の十五日ということに前から決めてある。これを知って驚いたのは勝安房である。薩州邸へ駆けつけた西郷との会見となった。その光景は、当時の番兵三原という人の話しによってわかる。

勝安房の来た十三日は、むろん総攻撃の命令は取消されていないから、薩州邸の門には厳めしい番兵が立っていた。三原はその一人であって次のように語っている。

私が番兵をしていると、向うから幕府の人らしいのが、ただ一人乗馬でやって来た。総攻撃の命が下っているのに、何の用事でも来たのか、合点がいかなかった。馬側についている馬丁が真白い足袋はだしで、小者の被る笠をかぶっていた姿が、いかにも粋で、いまだに眼底に残っている。

「誰か!」
私は大声でなりつけた。
「勝……!」
馬上の人はこうしか答えない。
「勝じゃわからぬ。もっと詳しく名乗れ!」
私はたたみかかてどなった。
すると、その人は馬から降りて丁寧な物腰で

「私は幕府の勝安房守と申す者ですが、西郷殿にお目にかかりたい。どうぞお取次ぎ

をお願いします」

と始めて面会を乞うた。

私は女関に案内して「妙な人が来たぞ、取次いで上げてくれ」と他の番兵に頼んだ。勝は案内されて奥深く入った。私たちが番兵の溜りでは、いろいろとその人の話しに花が咲いた。「全体あの勝という男は、何者なんだ」「知らんなア、何か幕府のエイ役人でもあるのだろうか」「そうだ、西郷どんがすぐ会われるぐらいだからきっとそうだ」

こんな話をしていると、西郷に送り出されて、勝が出てきた。見ていると西郷どんの挨拶はすこぶるいんぎんをきわめていた。それで

「西郷どんがあれまで丁寧にされるくらいだから江戸城にその人ありと知られた人物だらう」

と思ったぐらいのものだった。その時、私は十七才の少年であった。

有名な江戸城明け渡し最初の談判はとても簡単なもので、西郷と勝とは何らまともな相談はしなかつた何でも婦人の事を話したというから、たぶん静寛宮院様(和宮)のごことで語られたものであろう。二人は翌日さらに芝、薩州の下屋敷で会う約束をして手軽く別れた。

翌十四日は総攻撃の前日である。田町の下屋敷へは勝の方が一足先きにやって来た。西郷は洋服姿に総髪で下駄を穿いていたらしく、高輪から品川に出で、船で回って田町へ乗り込んだという。

その日の西郷は、何しろ邦家の運命を背負った大人物なのだが、脳目にはそんな気負ったところも少しも見えず、禁止動作はどことでもあつさりして、いささかも平常と異なるところはなかった。

話は一瞬にあっけなく決って、西郷の口からは、すぐさま勝の桐野や村田らに総攻撃中止の命が伝えられ、次から次へと全軍へ洩れなく伝達が行った。

歴史上に有名な江戸城明渡しという劇的光景の事実は、このように簡単なものであった。
(東郷吉太郎中将談話)

徳川政治と小田原足柄の史蹟

(郷土研究と歴史観の必要)

太田 康平

戦後各地で郷土史の研究が盛んになったことは誠に喜ぶべきことで、小田原にも史談会が出来、山口及び高知等の各県では組織的研究が進んでおり、殊に明治維新当時の歴史がとかく薩長政府本位にまごめられていたのを、国民側の史料研究発見が大いに開発されている。大体我が国の歴史は従来ともすれば、朝廷や中央政府本位で、行政を中心とし勝ちであったが、最近社会経済面や地方のことを重視する傾向が強くなって来たことは、歴史学の大きな進歩であり、この意味において郷土史の研究は単に郷土の文化発展のみならず、国史の開発に大に貢献するものである。

この盛んになった郷土史の研究は、今まで埋もれていた文献や史蹟を発見することが大きな使命であることは言う迄もないことであるが、又その発見した史料をどんな限で見ると、つまりどの様な観点によって取

扱いかも大きな問題である。つまり史料の窮極の目的は歴史を樹立することであり、それには取扱う人の主観によって史料の値打ちが大いに変わって来るから、正確優秀な歴史観を持つことが大切である。

そこで、他の時代はさて置き、江戸時代の歴史を見るに当時の史料は、徳川幕府が政策的に、幕府に都合のよい史料や史蹟を残し、都合の悪いものは抹殺したり、つぶした形跡のあることである。

大体徳川幕府創立に当たって、幕府と豊臣側の反抗、再興を恐れ、凡ゆる豊臣弾圧、抹殺の手段を採ったものであり、例えば東海道の交通において、美濃路を廃止し、旅人に関ヶ原及び秀吉の生地尾張中村を見せない為に近江から鈴鹿を越え桑名から海上七里を舟で熱田に通らせるといふ面倒な旅を強制していた。

又豊臣に反感を持つ織田信長の子孫三人や淀君に對

抗した北政所(秀吉の妻)の生家木下家の子孫二人を大名に取り立て、反豊臣の者を味方に引き入れている(これ等の人は関ヶ原の戦いで徳川方に付いていた)

そこで小田原地方の話に移るが、北条氏が豊臣に亡されたので、北条一族やその系類は豊臣に對して反対の立場であることは言う迄もないので、徳川は幕府創立後、右の織田や木下の子孫と同様に、北条の一族を採り出し、大和で一万石を与えて、大名に取り立てた(この織田・木下・北条の子孫は、曾って大きな勢力を持っていたので、徳川初期の不安な時代に大きな勢力となることを恐れ、何れも大名の最低資格の一万石しか与えなかった。つまり、反豊臣政策として大名には取り立ててやったが、大きくならないように小さなものにしておいたのであり、徳川の現実的な巧妙な硬軟政策の一端であった)

この様に織田・木下・北条の子孫は徳川幕府の反豊臣政策のお陰で思いも掛けない大名に取り立てられ、明治になってから何れも子爵を買って華族になり、今日迄家柄と血統が続いている

この徳川幕府の反豊臣政策における小田原地方の史蹟で有名なものは、久野の幻庵屋敷と湯本の早雲寺である。

久野の幻庵屋敷を作った幻庵は早雲の末子で、風流人であり、久野の中宿に良質の水が湧いていたので茶人の幻庵が大きな屋敷を作っていたが、徳川幕府は幻庵の北条の最高な一族であったから、反豊臣政策として北条を回想させる為にこの屋敷跡を保存させ、幻庵神社を作って今日に及んでいる。

だから、もし幻庵が豊臣側の人であったならば、徳川はこの屋敷を取りつぶしに相違なく、幻庵が相当に偉い人であろうがなからうが、それとは関係なしに、北条家の人であったことが今日迄史蹟が残されている最大の原因である。

又湯本の早雲寺は徳川の時代になって反豊臣政策からして幕府が莫大な寺領を与えて立派な北条五代の墓を作らせたもので、これは北条の子孫を大名に取り立てたことと同一の方針に基

くものであり、北条が豊臣に亡されたのでなければ徳川幕府もこんなことはしなかつたろう。

こういう徳川の反豊臣政策は、なかなか文獻に現れるものでなく、幾多の史実からして類推して結論を導き出すのであって、このような史実に底流していることを研究することも大きな歴史の使命であり、殊に郷土史の研究家は史蹟や史実の発見調査に当って、幅の広い歴史観を持つことが大切であり、この歴史観が結局郷土史を大きく大発展させることに役立つものである。

大老の登城を待ったため、巖山に登り絵馬堂に行った次左「ヤ、ヤ、コライカン」と慌てた。どうしたかと聞くと、次左、声を落して「ふんどしが汚れている。このままじゃ死ぬぬ。男の恥だ」。そこで山番の八蔵に頼みふんどしを買いに走らした。八蔵が女坂を下りかけたところで呼び返し、「もう一本、二本だけ買ってくれ」と追加した。前夜みんな白鉢巻を用意せよとの約束を思い出し、一つは代用鉢巻にするつもりであったのだ。それが間に合わず、八蔵が戻ったときは誰もいなかった。新ふんどし二本はのちに巖岩の円福寺から遺留品として幕府評定所へ届け出た。次左が斬り込みの際フリダマであったかどうかは明かでない。がいかに当時の武士気質が躍如たるものがある(M)

有村次左の禪秘話

有村次左衛門といつても知らぬ人が多からう。水戸浪士十七人とともに井伊掃部を桜田門外に襲ったただ一人の薩摩浪士である。江戸に出でて初めての辻斬りに人もあろうにお玉が池の千葉周作に斬りつけ、仕損じてその翌日から千葉道場に入り指南を受けたことは吉川英治作の「桜田事変」にある通りである。

この次左衛門が、万延元年三月上巳桜田門外に井伊

山上の歌

若山 牧水
木々はみなそびえて空に芽をぞ吹くかなしみ居れば踏む草もなし

窪田 空穂
夏の雲われらが上にかがやけりそを恍として仰ぎける日よ

山上の歌

若山 牧水
木々はみなそびえて空に芽をぞ吹くかなしみ居れば踏む草もなし

窪田 空穂
夏の雲われらが上にかがやけりそを恍として仰ぎける日よ

島津藩と秀吉の小田原征伐

平原 勝郎

天正十四年、豊後の大友義統を最後に少武・竜造寺・有馬・阿蘇・相良など、九州の諸豪族とその与党を征服した島津氏は、雄を鎮西にとなえ、薩摩、大隅、日向三国のほか九州六ヶ国のうち三分の二を領有してまさに旭日昇天の勢いであった。この有様を見て不快でならなかったのが天下統一の野望に燃える豊臣秀吉である。大友から救援を求められているのを幸い、翌十五年三月、三十七ヶ国の兵を集めていよいよ秀吉の薩摩征伐が始まった。

日向口と肥後路から潮のように大軍が押し寄せた。さすがに勇猛を誇る島津軍も長年の九州征服に疲れているから、秀吉の海上から直ちに背後を衝く奇想天外の作戦と、かずかずの智略には勇戦のひまもなく、もろくも敗れてしまつて五月には早くも和議の成立となつた。かくて九州の強豪を屠つた秀吉は、これで天下はまさに統一されようとしていたのに、伊達政宗と小

その時秀吉は弟羽柴秀長を大阪に置き、毛利輝元を呼んで京都を守らしめ、徳川家康を先鋒の大将として東海道から進発せしめることとなつた。そこで家康は二月十日は駿府を出発したが、この日には前田利家の先陣も金沢を出発、真田昌幸は信濃を出てこの征討軍に参加することになった。三月一日には愈々御大将秀吉は自ら十七万の兵をひきいて京都を出発した。かくて廿九日には家康と羽柴秀次が協力して箱根山中城を抜き、織田信雄等は葦山城の外郭を取つた。たまりかねた北条の守兵は四月一日箱根足柄から撤退して全軍小田原城に立籠り、氏政・氏直は関東八州の將士を尽して城を固守した。然し三日秀吉の全軍が箱根を越えて小田原を包圍したので、戦いは持久戦に入つて兵う攻めとなつた。この戦いで島津又一郎久保と北郷三久の軍が、いかに勇戦奮闘したか古記録にもそのことは委しく見えない。

七月五日になつて北条氏直は遂に力尽きて小田原城を降り、十三日秀吉は小田原城に入り、氏政と弟の氏輝に自刃を命じ、氏直を紀州高野山に追放した。かくて翌十四日には秀吉は小田原を出発して更に北征の途についたのであるが、島津久保等もこれに従つて大いに威を興與に示したのであつた。

この時國許にあつた大守島津義久(久保の父義弘の兄)は、太刀一腰と馬代銀三枚を秀吉に献じて小田原の戦捷を賀し、八月廿一日には書を琉球王に送つて、秀吉の戦捷を祝賀するため土地の産物などを献上せられよと勸めている。

八月下旬秀吉は奥羽を平定すると選つて近江の安土城に入つた。島津義久も京都に出て来て安土城で秀吉に謁して戦捷祝賀の挨拶を述べた。九月七日には久保なども奥羽から京都に還り二十日大阪から乗船國許に凱旋したのである。

(この久保は後文文祿元年征韓の役が起ると、父義弘と共に従軍渡海し各地に転戦して大功を立てたが、文祿二年九月八日唐島の陣中で病歿した。年廿二)筆者は郷土史家

内に石碑が建てられている先に一心堂主人が碑に刻せられた全文を写し、史談会に寄贈されたことがあつたので、私もついて行つて見た。表面には額面に「処世」と大書し、會員石塚政治楽天詠として二首の和歌が刻まれている。

神仏の心に通ふ誠もて
世を渡りなば榮しからまし
安らげく生存へるうれし
さよ神を敬ひ人を愛さむ

足柄村井細田誠踐会建之
乃木武○會長伊豆凡夫書
この碑の裏面には、石塚氏の経歴とその功績を讀んで終りに昭和七年二月の佳き日、従六位勲六等森丑太郎識とある。碑文によつて森氏は石塚氏の門下生であつたことがわかる。

石塚氏は旧小田原藩土石塚啓治氏の二男で安政四年五月小田原に生れ、育英事業に身を立て、富水・二川両校長等に歴任して大正十二年十月職を退くまで前後四十有余年格勳精勵、功績によつて屢々表彰され、公私団体からも幾度か感謝された。趣味としては謡曲、和歌を嗜み、古稀を過ぎても悠々自適を欲せず、名利を超越してひたすら世道の開発、人心の指導に致し、余生を唯皇國の弥栄を念とせられた旨が永々と記されている。私は石塚氏を知らないが、小田原にはいままなお氏を知る人も相当あろう

明治・大正時代にはかくの如く育英事業に一身を捧げて薄給に甘んじ、生徒から慈父の如き親しみと尊敬をもつて迎えられた高徳の士が各地に在り、三大節には半襲色の古びたフロロケットに身を固めうやうやしう教育勸語を奉読される姿が神々しく感じた記憶が残っている。現時の教育界の人々を比較して今昔の感に堪えないのは独り私だけではない。(斐田記)

八幡宮境内の石碑
市内井細田の八幡神社境

文苑
幽居
若杉一所

黄梅熟如綠陰稠。
烟雨鎖小樓。
奈此閉居無限悶。
新茶三椀試。——
滿庭子規花丹唇。
曉露凝粧似媚人。
回首故山遙不見。

子規啼処易傷神。

伊豆巡り団体旅行

雜詠 斐田 長平

月見草朝露うけて咲き残る
花のしばしのいぶきいとし
き

伊豆めぐり唄の下田の町に
来てお吉の墓を弔いて見つ
賑ひし妓楼のいまも残りい
て米利堅船の昔しのぼゆ
一日をバスにゆられて疲れ
たる人も見えず酒席賑ふ
達磨山にのぼりて

富士をみる山はこのやまこ
の山にまさる眺めはあらじ
とぞ思ふ

絵にもかき歌にもよみて達
磨山不二の眺めをとめむ
ものを

○ 浅井 久美
列車すぎ行線路の際にひそ
ひそと月見草咲きて夏の
日暮るる

川に入りて魚すくいし子等
の肌に緑風わたりぬ梅雨晴
れし午後

○ 広沢十五夜
心澄むはたるの光に子は付
てり

迷ひはたるくりやの冷の雨
近く
胡瓜もみ彩さわやかに夕駒
の座

事務果てて香水淡し夏衣

触る手に冷たく愛し黄金
虫

民族資料を集める郷土文化館のお願い

近年市内の各地に、近代
的の家屋が目立ってふえて
来た。これに伴って新型の
用具が古い物と置き換えら
れ、且ての必需品は場所を
追われて、惜しまれながら
も余儀なく始末される傾が
ある。歳末の大掃除に道祖
神へ納める物にしても同様
であろう。

郷土文化館は、この機に
臨んで民俗資料の収集に努
力しております。それらの
古い物は、時世の変遷と共
に、貴重な研究資料となる
ばかりでなく、これを用い
て郷土につくされた先代の
方々の労を偲び、感謝の意
を表することが出来るから
であります。

江戸時代や明治時代に用
いた物なら、それこそどん
な物でも結構です。これら
についても、半端物でも、お
知らせによって係員が参上
いたします。

(電話二二一六八)

編集後記

▼郷土史家平原勝郎氏の書

いた「島津藩と小田原征伐」
を読んで考えさせられる
ことは、北条五代が関東に
覇をとなえていたおり、九
州では島津の全盛期で冷ん
ど九州一円を席捲せんとし
ていた。秀吉によって同じ
運命となったが、北条の滅
亡に反して島津方では薩隅
日三州の旧土が残った。そ
の後関ヶ原戦争においても
島津は徳川に敵対して他の
西軍の將は悉く遠島又は誅
りつされたに拘わらず、何
のとも受けず旧土は完
全に残った。これも当時の
政策によるか島津の威を憚
ってのことか、大田康平氏
の説による裏面諷を試みて
の研究も興味深いものがあ
ろう。

▼島津の祖先忠久は頼朝の
庶子で丹後局が産んでいる
が、丹後局は上府中大夫の
生れであり、局は政子の迫
害を恐れて深夜鎌倉を脱出
落ちのびる際、いまの鴨宮
を通過しくらやみのなかを
狐が道案内をしたという故
事がありこの辺一帯を稻荷
(とうか)の森と呼ばれて
いたと内田武雄氏に聞いた
が、たといこれが伝説に過
ぎぬとしても、島津の守本
尊は稻荷神社であることを
思いあわせてそこに何らか
の因縁があるように思う。
▼酷暑の折柄各位のご自愛
を祈ります。本日も印刷所
の都合で発刊が遅れました
ことをおわび申し上げます。
(斐田)

<p>小田原駅前 職業安定所前向い</p> <p>喜仙寿し</p> <p>江戸風味天婦ら</p> <p>TEL 3747</p>	<p>小田原信用金庫</p> <p>小田原市幸1の179 (電話(0465)23121)</p> <p>理事長 鈴木十郎</p>	<p>有限会社 あめあるよ</p> <p>代表取締役 川口 浩</p> <p>小田原市 曾我谷津616番地 電話 (0465) 473808番</p>
---	---	--

<p>セトモノの御用は (陶磁器・陶管・植木鉢)</p> <p>有限会社 大川商店</p> <p>TEL 8513・3055</p>	<p>建築金物 家庭金物</p> <p>株式会社 星崎仲吉商店</p> <p>小田原市多古412番地 電話 2718</p>	<p>電気工事一式・設計・請負 販売修理</p> <p>兵藤電気商会</p> <p>小田原市下曾我駅前 電話国府津473578番</p>
---	---	---

<p>御料理仕出し 御弁当</p> <p>株式会社 東華軒</p> <p>代表取締役 飯沼相三郎</p> <p>小田原駅前 TEL (0465) 5061~2</p>	<p>楽しい生活 明るい読書</p> <p>八小堂</p> <p>小田原駅前 TEL 5388~9</p>	<p>船志澤</p> <p>TEL 3131</p>
--	--	-----------------------------------